

独思録：「ウイグルの騒乱」(7/12)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

薄田泣菫に「西大寺の伎藝天女」というエッセイがあります。

『私は西大寺をたづねて、一わたり愛染堂の寶物を見終つた。

「寶物はもうこれでお終ひです。」

と、ぶつきら棒に言ひすてたまま、年つ喰ひの、ちんちくりんな西大寺の小僧は、先へ立つてさつと廊下へ出掛けて行つたが、つとまた後がへりをして、

「あ、忘れとりました。此處におゐでやすのが、伎藝天女さんです。」

薄間い片隅に向き直つて、小生意氣に大人のやうにくつと顎をしゃくつて見せる。』

という行で始まり、

『私の見たところでは、この佛には別に際立つてこれといふ程の秀れた技術も無ければ、人の心を引き入れるやうな力にも乏しい。が、それでも一度は人間の生活と技能の力の源泉となつた事もあつたのである。しかし今となつては、その力のすべてはまたもとの人間自らに歸つて来て、人はもうさげすんだといつた風な さうでなくとも、詰らないといつたやうな眼つきをして、この佛達に向ふやうになつて来た。思ふに人間には永久に若からうとする心の傾向が有る。偶像破壊はこれに伴ふ必然の努力で、私達の生活とその周囲とを通じて、どんな時にも、どんな處にも絶えず繰返されてゐる。してみれば、私は道樂者の物好きな眼で、天女の姿を見入つたほかに、も一度虐殺者の氣持をもつて、このみじめな犠牲を見直さなければならぬ。』

という作者の思いを綴っています。

伎藝天女は、大自在天(シヴァ神)が天界で器樂に興じている時、その髪の毛の生え際から誕生した天女とされ、容姿端麗で器樂の技芸が群を抜いていたため、技芸修達、福德円満の守護善神とされています。

ヒンドゥー教などに相当する尊格を特定することができず、梵名も不詳で、父尊の額から生まれるという出自に注目し、ギリシャ神話のアテナとの関連を指摘する説もあります。伎藝天女は、中国では多くの作例があるそうですが、日本では単独での信仰がそれほど広まらなかったこともあり、現存する古像の作例は秋篠寺の一体のみとされ、重文に指定されています。

薄田泣菫は、何故、『も一度虐殺者の氣持をもつて、このみじめな犠牲を見直さなければならぬ。』と伎藝天女さんを見直したのでしょうか。

今正に、伎藝天女さんが、ギリシャ神話のアテナから日本にやって来たルート、シルクロードの道筋に当る中国新疆ウイグル自治区で、大規模な暴動が起きており、新華社通信によれば、7月10日深夜時点で、死者が184人に上ったことが明らかにされています。しかし、死者の数をめぐっては、世界の亡命ウイグル人を組織する「世界ウイグル会議」(本部・ドイツ)による「最大3000人」と大きく違ってきます。

18世紀、清のジュンガルに征服され、その支配下に入るに至り、「ムスリムの土地」を意味する「回疆」を「新しい土地」を意味する「新疆」などと、清朝側から呼ばれるようになって以来、中国胡錦濤国家主席がラクイラ・サミット開幕直前にイタリアから緊急帰国し、サミット参加各国が「国内が大変だと思ったのだろうが、普通は国際会議から帰らない」と驚きをもって受け止められる今日まで、漢民族によるウイグル族抑圧が続きます。

まさか、薄田泣菫が現在を見越して書いた訳ではではないでしょうが、中国は『も一度虐殺者の気持をもって、このみじめな犠牲を見直さなければならぬ。』時に来ていると思います。

#### <伎藝天女>

仏教を守護する天部の神のひとり。

『摩醯首羅天法要』『摩醯首羅大自在天王神通化生伎芸天女念誦法』に説かれ、摩醯首羅天（大自在天＝シヴァ神）が天界で器楽に興じている時、その髪が生え際から誕生した天女とされる。容姿端麗で器楽の技芸が群を抜いていたため、技芸修達、福德円満の守護善神とされる。

ヒンドゥー教などに相当する尊格を特定することができず、梵名も不詳。父尊の額から生まれるという出自に注目しギリシャ神話のアテナとの関連を指摘する説もある。

伎芸天像は、中国では多くの作例があるが、日本では単独での信仰がそれほど広まらなかったこともあり、現存する古像の作例は秋篠寺の一体のみとされる。

現存の像は、頭部のみが平安時代の造立当時のもので首以下は鎌倉時代の後補によるものである。

造立当時の造様は不明で、現在の姿は経軌と大きく異なっており、伎芸天像とすることに疑問を呈する意見もある。



#### 毎日：「新疆・ウイグル族暴動 死者184人」(7/11)

新華社通信によると、中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市は10日、大規模暴動による死者数が10日深夜までに184人に上ったことを明らかにした。これまでの当局発表の死者数は156人だった。民族別の内訳は、漢民族が137人（男性111人、女性26

人) ウイグル族が46人(男性45人、女性1人)、少数民族でイスラム教徒の回族の男性が1人。

死者数をめぐっては世界の亡命ウイグル人を組織する「世界ウイグル会議」(本部・ドイツ)は「最大3000人」としている。

読売:「普通は帰らない 胡錦濤主席帰国に驚く各国」(7/8)

中国の胡錦濤国家主席がラクイラ・サミットの開幕直前にイタリアから緊急帰国したことについて、サミット参加各国は「国内が大変だと思ったのだろうが、普通は国際会議から帰らない」(日本政府筋)と驚きをもって受け止めている。

胡主席との会談を予定していた首脳も多く、改めて仕切り直しを迫られた格好だ。



< 薄田泣菫 (1877-1945) >

詩人。本名、淳介(じゅんすけ)。岡山県浅口郡大江連島村(現在の倉敷市連島町)生まれ。

岡山県尋常中学校(後に第一岡山中学校。現在の県立岡山朝日高校)中退後上京、上野書館に通いながら塾で独学。

帰郷後「小天地」を編集しながら「明星」などに詩を載せ、『暮笛集』『白羊宮』などで島崎藤村、土井晩翠の後を継ぐ浪漫派詩人として登場、象徴派詩人として蒲原有明と併称された。

大正以後は詩作を離れ、『茶話』『艸木虫魚』などの随筆を書いている。



### 春秋：「栄枯盛衰」(7/9)

国力は栄枯盛衰がつきものである。時の移り変わりとともに国家間の力関係も浮き沈む。大航海時代に席卷したポルトガルやスペイン、産業革命で世界を主導した英国。冷戦終結で唯一の超大国になった米国も金融危機でしばみがちだ。

毎年恒例の主要国首脳会議（G8サミット）がイタリアで開幕した。きょうのG8と中国やインドなど新興国との拡大会合が実は本番とされたのに、肝心の中国の国家主席がウイグル暴動を受け急きょ帰国した。経済、貿易、環境……。中国抜きではどれも進まない。中国主席の不在が中国の存在を一層際立たせる。

中国は今年か来年中にも日本を抜き、世界第2位の経済大国にのし上がる。経済規模からみればれっきとした主要国だろう。中国をサミット正式参加国に加えるべきだとの議論が一部に浮上するゆえんか。米オバマ政権は中国が加わるG20金融首脳会合の議題に温暖化や核軍縮なども加え、定例化を目指すという。

だが、時によって主要国と途上国の立場を使い分けるのが中国の外交手法だ。「我々がここに集ったのは共通の信念と責任を分かち合っているからだ」。1975年、初サミットのランブイエ宣言でうたった共通の信念と責任を中国は分かち合えるか。まずはウイグル暴動をどう收拾するか。世界は注視している。

#### < 主要国首脳会議（サミット） >

アメリカ合衆国、イギリス、イタリア、カナダ、ドイツ、日本、フランス、ロシア（五十音順）の8ヶ国及び、その年のEU議長国の政府首脳と欧州委員会委員長が年1回集まり、国際的な経済的、政治的課題について討議する会議である（その他の国の首脳や国際機関の代表も例外的に出席）。合わせて、数多くの下部会議や政策検討も行われる。



#### < ランブイエ宣言（仮訳） >

1975年11月17日

フランス、ドイツ連邦共和国、イタリア、日本国、グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国及びアメリカ合衆国の元首及び首相は、1975年11月15日から17日までランブイエ城に集い、次の通り宣言することに合意した。

1. 我々は、この3日間に世界の経済情勢、我々の国々に共通する経済の諸問題、これらの人間的、社会的及び政治的意味あい、ならびにこれらの問題を解決するための諸構想について、十分かつ実り多き意見の交換を行った。
2. 我々がここに集うこととなったのは、共通の信念と責任とを分かち合っているからである。我々は、各々個人の自由と社会の進歩に奉仕する開放的かつ民主的な社会の政府に責任を有する。そして、我々がこれに成功することは、あらゆる地域の民主主義社会を強化し、かつ、これらの社会にとり真に緊要である。我々は、それぞれ、主要工業経済の繁栄を確保する責任を有する。我々の経済の成長と安定は、工業世界全体及び開発途上国の繁栄を助長することとなる。
3. ますます相互依存が深まりつつある世界において、この宣言に述べられている諸目的の達成を確保するために、我々は、我々の十分な役割を果たすとともに、経済の発展段階、資源賦存度及び政治的、社会的制度の差異を越え、すべての国々の間の一層緊密な国際協力と建設的対話のための我々の努力を強化する意図を有する。
4. 先進工業民主主義諸国は、失業の増大、インフレの継続及び重大なエネルギー問題を克服する決意を有する。今回の会合の目的は、我々の進捗状況を検討し、将来克服すべき諸問題をより明確に確認し、かつ、我々が今後辿るべき進路を設定することであった。
5. 最も緊要な課題は、我々の経済の回復を確保し、失業がもたらす人的資源の浪費を減少せしめることである。経済の回復を確固たるものとするにあたり、その成功を脅かすこととなる追加的インフレ圧力の発生を回避することが肝要である。目的とすべきは、着実かつ持続的な成長である。かくして、消費者及び企業家の自信が回復されることとなる。
6. 我々は、我々の現在の政策が両立し、かつ、相補うものであり、回復が進行しつつあることを確信する。しかしながら、我々は、政策の遂行にあたり、警戒を怠ることなく、また、時宜に応じ対処する必要性を認める。我々は、回復の挫折を許容しない。我々は、インフレの再燃を容認しない。
7. 我々の関心は、また、世界貿易、通貨問題及びエネルギーを含む原材料の分野における新たな努力の必要性に集中した。
8. 国内的回復及び経済の拡大の進行に伴い、我々は、世界貿易の量的増大の回復に努力しなければならない。その増大と価格安定は、開放された貿易体制の維持により促進されることとなる。保護主義再燃の圧力が強まりつつある現在、主要貿易国は、OECD プレッジの諸原則に対するコミットメントを確認することが緊要であり、また、他国の犠牲において自国の問題の解決をはかり得るような措置に訴えることは、それが経済、社会及び政治の分野において有害な結果をもたらすものであり、回避することが緊要である。すべての諸国、なかんずく国際収支において強い立場にある諸国及び経常収支上の赤字国は、互恵的世界貿易の拡大のための政策を推進する責任を有する。
9. 我々は、多角的貿易交渉が促進されるべきであると信じる。この交渉は、東京宣言に

もられている諸原則に従って、一部の分野における関税撤廃をも含む大幅な関税引下げ、農産品貿易の相当な拡大及び非関税措置の軽減を目的とすべきである。この交渉は、最大限の貿易自由化を達成することを目的とすべきである。我々は、1977年中にこの交渉を完了するとの目標を提案する。

10. 我々は、緊張緩和の進展及び世界経済の成長の重要な一要素として、我々と社会主義諸国との経済関係の秩序ある実り多き増進を期待する。

我々は、また、現在進められている輸出信用に関する交渉を早期に完結するための努力を強化する。

11. 通貨問題に関し、我々は、より一層の安定のために作業を進める意図を確認する。この作業は、世界経済の基調を成す経済・金融上の諸条件のより一層の安定を回復する努力をも含んでいる。同時に、我々の通貨当局は、為替相場の無秩序な市場状態またはその乱高下に対処すべく行動するであろう。我々は、国際通貨制度の改革を通じて安定をもたらす必要に関し、他の多くの国の要請により、合衆国とフランスの見解に歩み寄りがみられたことを歓迎する。この歩み寄り、IMFを通じ、同暫定委員会のジャマイカでの次期会合における国際通貨改革の諸懸案に関する合意を助長することとなろう。

12. 開発途上国と先進工業世界との間の協調的關係及び相互理解の改善は、それぞれの繁栄の基盤をなす。我々の経済の持続的成長は、開発途上国の成長のために必要であり、また、開発途上国の成長は、我々の経済の健全性に大きく貢献するものである。

開発途上諸国の現在の大幅な経常収支赤字は、これらの諸国のみならず世界全体にとって重大な問題である。この問題は、幾多の相互補完的な方途によって対処されなければならない。いくつかの国際的会議における最近の諸提案は、既に先進国と開発途上国との間の話し合いの雰囲気改善した。しかし、開発途上国を助けるために、速やかな実際的行動が必要とされている。従って、我々は、開発途上国の輸出所得の安定化のための国際的諸取極め及びこれら諸国の赤字補填を支援する措置を緊急に改善するにあたり、IMFその他適当な国際的場において我々の役割を果たすものである。この関連において、最貧開発途上国に重点が置かれるべきである。

13. 世界経済の成長は、エネルギー源の増大する供給可能性に明らかに結びついている。我々は、我々の経済の成長のために必要なエネルギー源を確保する決意である。我々の共通の利益は、節約と代替エネルギー源の開発を通じ、我々の輸入エネルギーに対する依存度を軽減するために、引続き協力することを必要としている。これらの諸施策及び産油国と消費国との間の双方の長期的利益に応えるための国際協力を通じて、我々は、世界エネルギー市場におけるより均衡のとれた条件と調和のとれた着実な発展を確保するために努力を惜しまない。

14. 我々は、12月16日に予定されている国際経済協力会議の開催を歓迎する。我々は、すべての関係国の利益が擁護され、かつ増進されることを確保するとの積極的考え方に立ってこの対話をとり進める。我々は、先進工業国も開発途上国も、世界経済の将来の

成功と、その基礎となる協力的政治関係に共に重大な利害を有していると確信する。

15. 我々は、既存の制度の枠組み及びすべての関係国際機関において、これらのすべての問題についての協力を強化する意図を有する。

### 天声人語：「支配者然とした優越意識」(7/9)

もう20年も前、中国の新疆ウイグル自治区を訪ねたとき、ウイグル族に対する漢族の蔑（さげす）みをしばしば感じた。たとえば取材車の運転手は、「連中を乗せると車が羊くさくなる」と同乗させるのを拒み続けた。ウイグル人は羊の肉を常食するからだ。

あるいは自治区政府の役人は、「仕事で彼らと組むのはごめんだ。結局、自分の仕事が2倍に増えるだけ」と渋面を作った。ウイグル人は怠惰で、責任感も乏しいという悪口である。支配者然とした優越意識が鼻についたものだ。

抑圧された民族感情の渦巻くこの地は「シルクロードの火薬庫」とも呼ばれる。そこがまた火を噴いた。炎は大きい。胡錦濤（フー・チンタオ）主席はサミットへの出席を取りやめ、急きょ帰国した。去年のチベットといい、封じるほどに噴き出す中国の少数民族問題である。

死者は少なくとも150人、負傷者も合わせれば千人を超すという。自警団さながらに、こん棒やパイプを持ってデモをする漢族の写真が紙面にあった。憎悪の充満した一触即発の危うさが、遠い地から伝わってくる。

古くから漢族は、西域にエキゾチックな宝物を求めてきた。現代の宝は豊かな地下資源だという。政治を仕切り、富を求めて増え続ける漢族に向くウイグル人の反感は膨らんでいる。

この自治区には『西遊記』にも登場する、「炎の燃えさかる火焰山（かえんざん）」がある。孫悟空が芭蕉扇（ばしょうせん）であおいで炎を消す場面は名高い。ひるがえって今回の騒乱である。民族の声たる炎を、中国政府が力づくの弾圧という「扇」で消すことがあってはなるまい。

#### < 中国新疆ウイグル自治区 >

伝統的には、テュルク系民族が多いことからペルシア語で「テュルク人の土地」を意味するトルキスタンと呼ばれ、現在の国境を越えた幅広い地域の一角として、中央アジアの文化圏に属してきた。一方で、中国から西域と呼ばれたこの地域は中国との政治的・経済的な繋がりも古くから有している。

漢代と唐代には、中国の直接支配下に置かれた時期もあるが、唐代後期、ウイグル帝国の支配下に入り、9世紀、ウイグル帝国が瓦解したのちも、ウイグル人の残存勢力による支配が続く。

13世紀、チャガタイとその子孫による支配が行われた。16世紀に至りヤルカンド汗国が地域を統一したが、17世紀末ジュンガルが征服した。

18世紀、清のジュンガル征服にともなってその支配下に入り、19世紀には各地で反清反乱が相継ぎ、辛亥革命の後、中華民国に属すが、1933年と1944年の二度にわたって土着のムスリム（イスラム教徒）によって民族国家東トルキスタン共和国の建国がはかられた。

しかし、国共内戦後の1949年に再び共産党との和平交渉で中国に統一され、1955年に新

疆ウイグル自治区が設置された。



### 編集手帳：「少数民族の不満」(7/8)

中国共産党に君臨した毛沢東が専用列車で国内を旅したとき、沿線の党支部は遠方の水田から見ばえのいい稲穂を大量に抜き取り、線路に沿って植え替えた。

最高権力者に褒めてもらいたい一心から出た豊作の偽装工作であったと、毛主席の元主治医、李志綏（りしすい）氏が「毛沢東の私生活」(文芸春秋刊)に書いている。

1年前の北京五輪開会式には、民族衣装を着た「中国の56民族からの56人の子供たち」が登場し、団結を世界に誇示した。じつは偽りで、大半が漢族の子供だったことが後に露見している。だます相手が独裁者から国際社会に、偽装の小道具が稲穂から子供に変わっただけである。

新疆ウイグル自治区で起きたウイグル族による暴動の報を聞く。死亡者は150人以上という。厳しく抑圧されてきた少数民族の不満が事件の根にあるといわれ、力ずくの鎮圧で「声」を封じられる雲行きにはない。また、封じてはならないだろう。

今年10月の建国60年を機に、共産党政権は「歴史的功績」を自賛する予定という。経済がいかに成長しようとも、人間の尊厳が1本の稲穂ほどに軽い国で、何を誇るのだろうか。

<李志綏(1919-1995)>

1954年から1976年に毛沢東が逝去するまで毛の個人医師を務めた医者。北京生まれで代々医師の家系、曾祖父は清朝で御医(皇帝の主治医)を務めた。

アメリカへ移民後に毛沢東の伝記である『毛沢東の私生活』を著した。この本は大きな論争を引き起こし、中国国内では出版が禁止されている。

テレビのインタビューで毛についてもう一冊伝記を書くことと発表したあと、2週間後に息子の家のバスルームで心臓発作が原因で死体が発見された。彼はアメリカへ移民後息子と共に暮らしていた。



### 余録：「ウイグル暴動」(7/9)

トラとオオカミとキツネが獲物を分ける。オオカミはトラに、カモシカはあなた様、キジは自分、ウサギはキツネに分けると提案した。するとトラはオオカミを殴りつけた。次のキツネはウサギはトラの朝食に、キジはその昼食に、カモシカは夕食にすると答えた。

トラが上機嫌で「正しい分け方を誰が教えた」と聞くと、キツネは「オオカミを見て教えました」 - - どこかで聞いた話と思った方、そうイソップの「獅子の分け前」のトラ版だ。こちらは中国の新疆ウイグル自治区に伝わる民話だという。

強者は利益を独り占めにするという寓話（ぐうわ）がどこで生まれたにせよ、古くから東西の文物がさかんに行き交ったこの地に伝わるのは不思議ではない。だが今そんな土地に行き場のない怒りや憎悪がうっ積するのはいったいどうしたことだろう。

多数の死傷者を出したウイグル人暴動に続き、治安当局によるウイグル人の拘束、漢民族の反ウイグル人デモなど混乱が続く区都ウルムチだ。サミット拡大会合に出席予定の胡锦涛主席も騒乱への対応のため急きょ帰国する事態になった。

中国政府は暴動を亡命組織の国際陰謀であるかのように非難する。だがウイグル人と漢族住民との経済格差は大きく、自治区の「漢族化」へのウイグル人の不満は募っていた。現状を「トラの分け前」にも似た漢族支配と受け止めるウイグル人の反感は発火点に達していたようだ。

暴動への漢族の反発も激しく、事態は民族対立の様相も帯びる。それも多民族共存に向けた富の「正しい分け方」をないがしろにした民族政策の結果だ。腕っぶしによる分け前決定に代わる収拾策を世界が見守っている。

<イソップ (BC619-BC564?) >

古代ギリシアの寓話作家。当時の記録がなく、半ば伝説の人物である。

ヘロドトスの『歴史』に、歴史上の人物として名が出てくるのが、最初の記述である。

一般に伝えられる話では、元はサモスの市民イアドモンの奴隷だったが、語りに長けており、解放されたという。

多くの寓話を残したが、すべてがイソップの創作ではない。それ以前から伝えられていた寓話、後に創作された寓話があとからイソップ寓話とされたりしたほか、出身地（小アジア）の民話を基にしたものも多数含まれているとされる。

